

# Facebook を用いた企画の有効性に関する事例報告

## ～東日本大震災被災地支援こどもサマーキャンプ in 秋田～

発表者・共同研究者 ○及川 真一（仙台大学大学院 スポーツ科学研究科 1年）

キーワード：フェースブック、効率化、情報共有、被災地支援、こども、あそび場

### 1.背景と目的

東日本大震災において、多くの方がふるさとを失った。復興を急ぐ中で見落とされがちだが、復興の主役は未来を生きるこども達である。いま、私たち大人がなすべきことは、被災地のこどもの気持ちを思い、復興の主役として尊重することである。しかし、震災により仲間と大声を出して笑ったり、走り回ったりできるあそび場が失われてしまった。公園や空き地などは、仮設住宅の建設や瓦礫置き場となり、道路は復興支援の大型ダンプなどが常に走る危険な状況である。さらに、立ち入り規制や放射能汚染問題などによって、こども達が自然環境(海、山、川)で遊ぶ体験(経験)は困難な状況である。このことから、「こどもの笑顔が輝き、こどもを核としたコミュニティの再生」のために、秋田県内の有志を集い、被災地の地域再生・復興における「つなぎ役」になれないかと考え、こどもと大人が共に向かい合い、まちの再生を「学びの場」として取り組み、「声なき未来のこども達」の声に耳を傾け、こどもとともに学び、こどもと共に考える場を創る活動の取り組みを行った。これらのことから、「秋田こども遊び応援実行委員会」を発足、こども達の生きる力と復興支援をテーマとした「海だ！山だ！川だ！外で遊ぼうよ！こどもサマーキャンプ in 秋田」を開催した。

### 2.イベント概要

#### (1) 二つの目的

- ①被災地のこども達と保護者を秋田に招き入れ、秋田と被災地をつなぐ復興への手助けすることを第一の目的とする。
- ②第二の目的は、親子で参加することにより、「見る、聞く、話す、食べる、あそぶ、つくる、育てる」という生活の営みを、共に見つめなおす「きっかけづくり」と被災地が「元気のあるまち」を取り戻し、こども達の力で、ふるさとづくりを牽引できるよう「成長」への支援を目的とする。

#### (2) 実施場所・期日・募集対象及び人数

- ①秋田市桂浜海水浴場、雄物川、太平山リゾート公園。
- ②宿泊地；太平山リゾート公園内、秋田市太平山自然学習センター。
- ③平成 24 年 7 月 21 日（土）～22 日（日）一泊二日。
- ④岩手県、宮城県在住の小学 4 年生～6 年生とその保護者・引率者 各県 40 名程度。
- ⑤被災地から秋田県内に移住している、小学 4 年生～6 年生 40 名程度。
- ⑥秋田県在住の小学 4 年生～6 年生 40 名程度。

#### (3) プログラム内容

「コミュニケーションプログラム(交流)」と「アクティビティープログラム」の2つの要素を取り入れ構成する。これら2つのプログラムは、野外(自然環境)設定の中で5つの感覚(視覚、味覚、聴覚、嗅覚、触覚)を磨き、「人と自然」「自分自身」「他者と自己」「生態系間」の関係性を理解し、自然体験を

通じて他人と共に協調し、他人を思いやる心などの豊かな資質・能力を養うことができる。

#### 【コミュニケーションプログラム】

- ①「日本赤十字社安全救急法」②「海と川の安全対策と水難救助法」③「サッカーボールであそぼう」
- ④「アウトドア体験（キャンプ泊、キャンプファイヤー）」

#### 【アクティビティープログラム】

- ①海のプログラム(サーフィン体験)②山のプログラム(アウトドア体験)③川のプログラム(カヌー体験)

## 2.運営体制

秋田市内で活動している企業、NPO法人、教育機関、子育て支援関係者、市民団体、被災地の支援関係者、医療・福祉関係者、トップスポーツ競技関係者、レクリエーション関係者など 21 団体により「秋田子ども遊び応援実行委員会」を組織し、筆者が実行委員長に就いた。委員は、それぞれの専門分野において実践者であり、多様な角度からあそびを通じて子ども達の明るい未来を応援できる委員構成となっている。また、事務局を日本赤十字秋田看護大学・短期大学内に設置。大学内に事務局を設置することによりボランティア活動の推進を行うことができた。ボランティアは大学生を中心に約 60 名、一般ボランティア 60 名。スタッフ・ボランティア総数は約 200 名体制となった。活動資金は、秋田県スギッチファンド助成金と企業等に対して協賛金を募った。

## 3. Facebook の活用について

このイベントは準備期間が非常に短く、実行委員全員が集まったの会議形式は困難であった。(毎週木曜日、実行委員会会議を開催(計 9 回)) そのため早急に運営体制を整えることが急務となり、実行委員、ボランティアスタッフなどとの情報共有、企画告知などを行うツールとして Facebook を活用した。

## 4.結果

Facebook の活用により、「情報共有」「企画告知」などを携帯端末やPCなどの Internet 環境を利用して、手軽に情報発信や共有することが可能となり、効率的に企画運用することができた。しかし、個人情報に関する情報などは、厳重な管理が必要なため、それらに関する事柄については Facebook を利用しなかった。コミュニケーションツールとして活用した Facebook であったが、効果的要素だけではなく、欠点も多く見られた。「Face」であったとしても表情が見えない文字体の情報であるため、受け取り側の捉え方によっては、混乱を招くこともあった。しかし、短期間で企画を実施できた手法の一つとしてこの Facebook の存在意義は大きなことであった。

サマーキャンプの様子ならびに Facebook の詳細については、研究大会当日に発表する。

